

育児意識と心理的離乳の関係

Relationship between the consciousnesses of childcare and the psychological weaning among women's college students

田 島 啓 子¹⁾ 雨 宮 由 紀 枝²⁾

Keiko TAJIMA and Yukie AMEMIYA

Abstract

The purpose of this questionnaire study was to investigate the relationship between the consciousness of childcare and the psychological weaning among 326 women's college students using one-way analysis of variance.

Main findings were as follows:

- (1) The students majored in childcare took significantly higher score of the consciousness of childcare.
- (2) In the general group, the consciousness of childcare showed significant positive relation to the psychological weaning.
- (3) As compared with the general group, the consciousness of childcare of the students majored in childcare had weaker positive relation to their psychological weaning.

It was suggested that learning about or experiencing on the child's development and child-rearing changed the relationship among the consciousness of childcare, the psychological weaning and experiences in childhood. Further analyses would be needed concerning that changing processes.

keywords : *Consciousness of childcare, Psychological weaning, Questionnaire study*

I. 問 題

新人口推計によると、今後、一層少子高齢化が進行し、本格的な人口減少社会になるとの見通しが示されている。合計特殊出生率は、過去最低を更新した2005年の1.26よりはやや上昇したものの、2007年には1.34にとどまり、総人口に占める子どもの割合も約2割程度に低下している(厚生労働省編, 2008)。また、日本人の平均初婚年齢は、2006年で、夫が30.0歳、妻が28.2歳と上昇傾向を続けており、晩婚化が進行している。出生したときの母親の平均年齢は、2006年で、第1子が29.2歳、第2子が31.2歳、第3子が32.8歳となっており、晩産化も進行している。高年齢になると、出産を控える傾向にあることから、晩婚化や晩産化は少子化の原因となっていることが指摘されている(少子化社会白書, 2008)。

少子化に歯止めをかけ、国民が希望する結婚や出産を実現できる支援内容や行政施策を策定、実施するために、少子化に関連する要因が政府、地方自治体、民

間機関、研究者などにより精力的に調査研究されてきた(厚生労働省雇用均等・児童家庭局, 2004; 内閣府大臣官房政府広報室, 2004; 三鷹市, 2004; 子ども未来財団, 2001; 子ども未来財団, 2004大日向, 1988; 前田, 2004; 原田, 2006; ほか)。その結果、結婚することや子どもを持つことに対する国民意識にさまざまな変化があることが見出されている。

大日向(1977)は、わが国の昭和初期(A世代:1976年調査当時平均年齢67.2歳)、第2次世界大戦後の混乱期(B世代:同54.6歳)、現代(C世代:同31.5歳)の各時期に育児を担当した女性たちの母親としての意識・行動を調査し、母親としての意識や行動は社会情勢や時代状況とともに変容していることを明らかにした。大日向の母性に関する継続的研究(大日向1988; ほか)は、日本における伝統的母性観とその問題点、母性の発達変容、父性をめぐる現状や問題点など、多くの示唆を与えている。

さて、心理的離乳という概念はHollingworth(1928)により提唱され、生理的離乳と対比的に言及される概念である。12歳から20歳の間に青年には親の監護を離れて独立した人間になろうとする強い衝動が生じると

1) 日本女子体育大学(教授)

2) 日本女子体育大学(准教授)

いい、このような過程を「心理的離乳」と名づけた。落合・佐藤(1996)は、中学生、高校生、大学生、大学院生を対象とした質問紙調査より、親子関係のあり方の変化からみた心理的離乳への過程を明らかにし、青年期の親子関係は、①親が子どもを抱え込む親子関係/親が子どもと手を切る親子関係、②親が外界にある危険から子どもを守ろうとする親子関係、③子どもである青年が困ったときに親が支援する親子関係、④子どもが親から信頼・承認されている親子関係、⑤親が子どもを頼りにする親子関係、の5段階を経過しながら、心理的離乳へと発達的に変化していくことを見出している。また、松井・釜野(1996)は、高校生の時期が第1次心理的離乳(「親への依存」「親への反抗」)から第2次心理的離乳(「親への客観視と批判」「親への信頼と親密感」)の発達課題への移行期であり、「親への信頼と親密感」という目標において大学生の時期が第2次心理的離乳の達成期と推察している。さらに次世代の子育てへと向かうプロセスにおいて、心理的離乳は育児意識とどのような関連性をもつのであろうか。

こうした時代背景および先行研究をふまえ、本研究は、大学生という母親になる一歩手前の女性達を対象として、若い世代の育児意識と母親からの心理的離乳の状態を調査し、相互の関連性を明らかにすることを目的とする。あわせて幼児期の母子関係の体験との関連性を明らかにしながら、現代の子育て支援の一助とすることを試みたい。

II. 方 法

1. 調査対象

調査対象者は、女子大学の保育・幼児教育を専攻する学生93人(2年生48人, 3年生45人)、および保育・幼児教育専攻以外の一般学生326人(2年生148人, 3年生178人)、全419人であった。

2. 調査手続き

質問紙は大学の講義等で配布され、集団実施された。調査時期は2006年11月、回収率は95%であった。

3. 倫理的配慮

質問紙配布時に、調査目的は子育て支援をよりよく行うことであり、調査研究目的以外に使用することはなく、調査への参加は自由で参加拒否の権利があるこ

と、不参加による不利益はないこと、すべて統計的に処理し匿名性を維持すること、処理終了後は速やかに処分することを説明した。

4. 調査内容

質問項目は、女子学生の育児意識に関する項目、および女子学生が幼児期から児童期、思春期にかけて行動モデルとし、接触も多い母親との関係に焦点化し、母親からの心理的離乳に関する項目、学生の幼児期の母子関係の体験に関する項目とした。

1) 育児意識に関する項目

大日向(1988)の項目を参考に作成したもので、育児や子どもを産む事に対する積極的な態度を問うたものである。「育児を有意義な仕事としますか」(以下育有意義と略称、以下括弧の中はその項目の略称)「育児は、自分にとって生きがいになるとしますか」(育生甲斐)、「育児期間中、自分のやりたい事が制限されてもしかたないと思いますか」(育趣味制)、「結婚して、その人の子どもを産むのは幸せとしますか」(育幸福)、「育児は女性の義務としますか」(育義務)、「もし仕事と子育ての両立が不可能だった時、仕事を捨てても出産をとろうと思いますか」(育仕事制)、「本能としての母性愛はあると思いますか」(育母本能)、「育てる過程が楽しいといえると思いますか」(育過程楽)、「子育てによって、自分も成長できると思いますか」(育母成長)、の全9項目で構成されている。

2) 母親からの心理的離乳に関する項目

落合・佐藤(1996)の項目を参考に作成したもので、親が子を頼りにする最終的離乳段階にあると考えられる(落合・佐藤, 1996)学生たちに、親子の心理的距離について尋ねたものである。調査対象者の母親との関連性について、「あなたに相談をもちかけてくる事がありますか」(離相談)、「あなたに愚痴を聞いてもらうことがありますか」(離愚痴)、「あなたに精神的な面で頼る事がありますか」(離依存)、「あなたに話し相手になってほしいと思っていますか」(離話相手)、「迷ったときにあなたの考えを参考にしようと思いますか」(離子参考)、の全5項目で構成されている。

3) 幼児期の母子関係の体験に関する項目

落合・佐藤(1996)の項目を参考に作成したもので、学生の幼児期の母子関係の体験について問うたものである。調査対象者の幼児期における母親との関係を思い浮かべながら評定してもらい、「いつもあなたの事を気にかけていましたか」(幼常配慮)、「あなたを信頼し

ていましたか」(幼信頼),「あなたの事を信じているので、あまりうるさくいわないほうでしたか」(幼無干渉),「あなたのことをそっと見守ってくれましたか」(幼見守),「あなたの事を信じているからやってみるといってくれましたか」(幼激励),「あなたの考えを尊重し、自分の考えを押しつけることはなかったですか」(幼尊重),の全6項目から構成されている。

以上20項目のすべては、非常にそう思う、ややそう思う、ややそう思わない、非常にそう思わない、の4件法で実施した。分析には統計パッケージ SPSS14.0Jを用いた。

III. 結果と考察

1. 因子分析の結果

全20項目に対し、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、3因子が抽出された。全項目に対する因子分析の負荷量を、表1に示す。因子抽出に当たっては、累積寄与率が50%前後に至るまでの因子を採用し、因子負荷量0.4を基準として変数を集めた。寄与率の低い因子については、因子の意味解釈可能性が明確な場合に採用することを基準とした。

1) 第1因子：心理的離乳

第1因子として、学生の親からの心理的離乳に関係する項目が集まった。負荷量が最も高かったのは「離愚痴」であり、次いで「離相談」「離依存」「離話相手」「離子参考」の順となった。つまり「母親は、子どもに愚痴を聞いてもらうことがある」、「母親は、子どもに相談をもちかけてくることがある」、「母親は、子どもに精神的な面で頼る事がある」というものであり、いずれの項目も母親が成長した子どもを頼もしく思い、頼りに思う心情を表している。また、「母親は子どもに、話し相手になってほしいと思っている」、「母親は子どもに、迷った時にあなたの意見を参考にしようとする」で、いずれも親子が対等というより、子が親を支えることもあるという母子関係を表し、こどもの独立を認め、しっかりしてきた子どもに頼りたい親の態度を示している。以上のことから、落合・佐藤(1996)の心理的離乳の完成段階の定義である「子は子でありながら親になり、親は親でありながら子になる対等な親子関係」に基づき、これらの項目を含む第1因子を「心理的離乳」と名づけた。

2) 第2因子：育児意識

第2因子は、学生の育児意識に関する項目群である。

表1 全項目に対する因子分析の負荷量表

	1 因子	2 因子	3 因子
【心理的離乳】			
離愚痴	0.89	-0.08	-0.14
離相談	0.80	-0.07	-0.01
離依存	0.74	-0.02	0.02
離話相手	0.60	0.10	0.01
離子参考	0.59	0.07	0.16
【育児意識】			
育生甲斐	0.01	0.62	-0.01
育母成長	-0.09	0.60	0.02
育母本能	0.02	0.60	-0.06
育仕事制	-0.03	0.59	0.03
育幸福	0.00	0.59	-0.08
育過程楽	0.09	0.54	0.00
育有意義	0.00	0.51	-0.03
育趣味制	-0.01	0.42	0.09
育義務	-0.07	0.35	0.11
【幼児体験】			
幼見守	-0.09	-0.03	0.76
幼尊重	-0.01	-0.03	0.73
幼無干渉	-0.08	-0.13	0.68
幼激励	0.11	0.02	0.63
幼信頼	0.05	0.09	0.59
幼常配慮	0.14	0.19	0.37
寄与率	25.23	12.90	10.16
累積寄与率 (%)	25.23	38.13	48.29

因子負荷量の多いのは「育児は自分にとって、生きがいになると思う」「子育てによって、自分も成長できると思う」という項目で、育児に対し肯定的な評価をし、育児は自分にとって意味のある仕事であるとしてとらえている。以下、「本能としての母性愛はあると思う」「仕事と育児の両立が不可能だった時、仕事を捨てても、育児をとろうと思う」、「結婚してその人の子どもを産むのは、幸せと思う」、「育てる過程が楽しいといえると思う」、「育児は有意義な仕事と思う」、「育児期間中、自分のやりたい事が制限されてもしかたないと思う」、「育児は女性の義務と思う」となっており、いずれも育児や子を産む事についての積極的な意識の表明ととれる項目群であることから、この第2因子を「育児意識」と名づけた。

3) 第3因子：幼児体験

第3因子は、学生の幼時期の母子関係の体験についての項目群が集まった。幼児期の回想として、「母親は子どものことを、そっと見守ってくれた」で「母親は子どもの考えを尊重し、自分の考えを押しつけること

はなかつた」,「母親は子どもの事を信じているので,あまりうるさくいわないほうだった」,「母親は子どもの事を信じているからやってみろといってくれた」,「母親は子どもを信頼していた」,「母親はいつも子どもの事を気にかけていた」というもので,いずれも幼児期における母子関係の信頼と承認に関係する項目群であることから,この第3因子を「幼児体験」と名づけた。

2. 合成変数の作成

1) 心理的離乳の合成変数

第1因子を構成している「離愚痴」「離相談」「離依存」「離話相手」および「離子参考」の5項目に対して,「非常にそう思う(5点)」から「非常にそう思わない(1点)」の5段階評定で求めた回答の合計点(得点範囲5~25点)を算出し,「心理的離乳」とした。

2) 育児意識の合成変数

第2因子を構成している「育生甲斐」「育母成長」「育母本能」「育仕事制」「育幸福」「育過程楽」「育有意義」「育趣味制」および「育義務」の9項目に対して,「非常にそう思う(5点)」から「非常にそう思わない(1点)」の5段階評定で求めた回答の合計点(得点範囲9~45点)を算出し,「育児意識」とした。

3) 幼児体験の合成変数

第3因子を構成している「幼児見守」「幼尊重」「幼無干渉」「幼激励」「幼信頼」および「幼常配慮」の6項目に対して,「非常にそう思う(5点)」から「非常にそう思わない(1点)」の5段階評定で求めた回答の合計点(得点範囲6~30点)を算出し,「幼児体験」とした。

3. 合成変数得点の分析

以下で,結果の記述にあたって,一般学生と保育・幼児教育を専攻する学生を区別する場合,あるいは学年を区別する場合,「群」と呼んで2群を区別する。

1) 専攻別の比較

心理的離乳,育児意識,幼児体験に関する専攻別の合成変数得点を表2に示した。育児意識において専攻間で有意差が見られ,一般群<保育・幼児教育群($t(453)=2.251, p<.05$)という状況であった。一方,心理的離乳および幼児体験については有意な専攻差は見られなかった。

育児意識,すなわち育児に対する積極的態度について,保育・幼児教育群のほうが有意に高い得点を得て

いるのは,子どもの発達や保育・教育に関する知識とともに,保育実習など,育児関連の体験をする大学での学びの効果として,育児意識の高まりが生じた可能性が示唆されよう。

一方,母親が子どもを頼りにするという心理的離乳の達成状態や,幼児期に母親から信頼され,承認される母子関係の肯定的幼児体験の認知は,数年の保育・幼児教育専攻で得られる知識や経験程度では,そのような知識や経験が少ない一般群との間に有意差が生まれるのは無理なほど,認知的変化に時間がかかるものであることを示唆している。

2) 学年別の比較

心理的離乳,育児意識,幼児体験に関する学年別の合成変数得点を表3に示した。育児意識において学年間で有意差が見られ,2年生群<3年生群($t(417)=1.999, p<.05$)という状況であった。一方,心理的離乳および幼児体験については有意な専攻差は見られなかった。

以上の結果は,専攻別の結果と同様の傾向を示しており,学年の進行に伴い,保育・幼児教育専攻の場合には当然ながら,保育・幼児教育専攻以外の一般群の学生においても教職科目の学習を通して,子どもの発達や保育・教育に関する知識や実習など,広義の育児関連の体験をする大学での学びの効果として,育児意識の高まりが生じてくる可能性が示唆されよう。

それに対して,心理的離乳達成意識や肯定的幼児体験に関する認知については,一年の学年差くらいでは変化しないほど深層的な体験であることが示唆される。

表2 専攻別の因子得点の比較

	一般	保育・幼児教育	
心理的離乳	14.58(3.48)	14.80(3.40)	n.s.
育児意識	30.07(3.58)	30.86(2.73)	*
幼児体験	18.35(3.65)	18.78(2.98)	n.s.

数値は因子得点の平均値, ()は標準偏差 * : $p<.05$

表3 学年別の因子得点の比較

	2年生	3年生	
心理的離乳	14.90(3.01)	14.56(3.72)	n.s.
育児意識	29.93(3.60)	30.60(3.19)	*
幼児体験	18.30(3.34)	18.59(3.66)	n.s.

数値は因子得点の平均値, ()は標準偏差 * $p.<.05$

4. 心理的離乳, 育児意識, 幼児体験の関連性

1) 専攻別の検討

因子分析結果から作成した合成変数を用いて, 心理的離乳, 育児意識および幼児体験について, 一元配置分散分析を用いて分析し, 専攻別に多重比較を行った結果を表4に示す.

一般群では, 育児意識に対して, 幼児体験は有意 ($p < .001$) に関係しており, 心理的離乳もまた有意

($p < .01$) に関係していることが示された. つまり, 幼児期に信頼され承認される肯定的母子関係を体験した学生ほど, また心理的離乳が進んだ段階の学生ほど, 育児に積極的な態度がみられることが示された. また, 幼児体験と心理的離乳の状況とは有意 ($p < .001$) に関連性があり, 幼児期に親から信頼され承認される肯定的母子関係を体験した学生ほど, 心理的離乳が進んだ状態の学生であることが示された.

表4 専攻別の心理的離乳, 育児意識および幼児体験の関係

一般

育児意識				
		平均 (SD)	F 値	多重比較
幼児体験	Low N=165	29.28 (.272)	1.02***	Low<High***
	High N=161	30.88 (.275)		
心理的離乳	Low N=144	29.38 (.294)	9.89**	Low<High**
	High N=182	30.62 (.262)		
心理的離乳				
幼児体験	Low N=165	13.56 (.259)	31.71***	Low<High***
	High N=161	15.63 (.262)		

* : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

保育・幼児教育

育児意識				
		平均 (SD)	F 値	多重比較
幼児体験	Low N=41	30.24 (.386)	7.262**	Low<High**
	High N=52	31.63 (.343)		
心理的離乳	Low N=30	30.90 (.469)	0.099	
	High N=63	31.08 (.323)		
心理的離乳				
幼児体験	Low N=41	14.34 (.471)	5.996*	Low<High**
	High N=52	15.88 (.418)		

* : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

保育・幼児教育群では、幼児体験が育児意識に有意 ($p < .01$) に関係しており、幼児体験は心理的離乳にも有意 ($p < .05$) に関係している。つまり、幼児期に親から信頼され承認される母子関係を体験した学生ほど、育児意識が高く、心理的離乳が進んだ状態の学生であることが示された。しかしながら、心理的離乳が進んだ状態の学生が、育児意識は高いわけではないことが示された。

以上より、幼児体験は育児意識と心理的離乳に対し有意に関連性があることが示された。つまり、幼児期に親から信頼され承認される母子関係を体験した学生ほど育児意識が高く、心理的離乳が進んだ状態であることが示された。しかしその関連性は、一般群より保育・幼児教育群の方が弱いという結果であった。心理的離乳と育児意識に有意な関連性が認められたのは一般群のみであったのである。子どもの発達や子育てに

表5 学年別の心理的離乳、育児意識および幼児体験の関係

2年生

育児意識				
		平均 (SD)	F 値	多重比較
幼児体験	Low N=105	29.05 (.340)	14.49***	Low<High***
	High N=91	30.95 (.365)		
心理的離乳	Low N=82	29.40 (.340)	3.06	
	High N=114	30.95 (.335)		
心理的離乳				
幼児体験	Low N=105	13.93 (.276)	14.49***	Low<High***
	High N=91	16.02 (.297)		

* : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

3年生

育児意識				
		平均 (SD)	F 値	多重比較
幼児体験	Low N=101	29.92 (.312)	8.57**	Low<High**
	High N=122	31.16 (.284)		
心理的離乳	Low N=92	29.86 (.327)	8.67**	Low<High**
	High N=131	31.11 (.274)		
心理的離乳				
幼児体験	Low N=101	13.49 (.358)	16.50***	Low<High**
	High N=122	15.45 (.326)		

* : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

関して後天的に学んだり体験したりすることが、心理的離乳、育児意識、幼児体験の関連性を変化させるといふ示唆は興味深い。先に専攻別の因子得点で有意差が示されたのは育児意識であり、専攻の学習内容からも育児意識の高まりを生じさせている可能性が推測されるが、このメカニズムについてはさらなる分析が必要となる。

2) 学年別の検討

因子分析結果から作成した合成変数を用いて、心理的離乳、育児意識および幼児体験について、一元配置分散分析を用いて分析し、学年別に多重比較を行った結果を表5に示す。

2年生群では、育児意識に対して、心理的離乳との関連性は認められないが、幼児体験が有意($p < .001$)に関係していた。つまり、幼児期に親から信頼され承認される肯定的母子関係を体験した学生は、育児に対して積極的な態度がみられることが示唆された。また、幼児体験と心理的離乳の状況との有意($p < .001$)な関連性が示され、幼児期に親から信頼され承認される肯定的母子関係を体験した学生ほど、心理的離乳が進んだ状態の学生が多いことが示された。

3年生群では、育児意識に対して、心理的離乳と幼児体験がともに有意($p < .01$)に関係していた。つまり、幼児期に親から信頼され承認される肯定的母子関係を体験した学生ほど、また心理的離乳が進んだ状態の学生ほど、育児に対して積極的な態度がみられることが示唆された。また、2年生群と同様に3年生群でも、幼児体験と心理的離乳の状態との有意($p < .001$)な関連性が示され、幼児期に親から信頼され承認される肯定的母子関係を体験した学生ほど、心理的離乳が進んだ状態の学生が多いことがわかった。

以上より、学年の進行にともなって、幼児期の親から信頼され承認される肯定的母子関係の体験が、心理的離乳や育児態度に有意に関係していることが示された。

IV. まとめ—今後の子育てに向けて—

女子大学の一般学生326人(2年生148人、3年生178人)、および保育・幼児教育を専攻する学生93人(2年生48人、3年生45人)、全419人を対象者として、育児意識、心理的離乳、幼児体験を調査し、その関連性を一元配置分散分析を用いて評価した結果、以下のことが明らかになった。

- ① 心理的離乳、育児意識、幼児体験に関する専攻別の得点は、育児意識のみ一般群に比較し保育・幼児教育群の方が高かった($p < .05$)。
- ② 学年別では、育児意識について、2年生群<3年生群で、有意差($p < .05$)がみられた。
- ③ 育児意識と心理的離乳は、一般群において有意差($p < .001$)がみられ、心理的離乳が進んでいる学生ほど育児意識が高かった。
- ④ 専攻によらず、幼児体験は育児意識と心理的離乳に対し有意($p < .001 \sim p < .01$)に関連性があることが示された。つまり、幼児期に親から信頼され承認される母子関係を体験した学生ほど育児意識が高く、心理的離乳が進んだ状態であることが示された。
- ⑤ 心理的離乳、育児意識、幼児体験という関連性は、一般群に比較して保育・幼児教育群の方が弱い。

子どもの発達や子育てに関して後天的に学んだり体験したりすることが、心理的離乳、育児意識、幼児体験の在りようを変化させ、関連性をも変化させるといふ示唆を得たが、このメカニズムについてはさらなる分析が必要となる。また、今回は幼児体験として母親から信頼され承認される母子関係の肯定的体験を取り上げたが、これが育児意識や心理的離乳に有意に関連していることが示された。Bowlby(1969)以来、子どもが経験する親の養育態度の重要性については多くの研究者が注目してきたが、今回もまた、親の養育態度が育児意識や心理的離乳に与える影響について、さらなる研究の必要性を示した結果と考える。

現代日本においては、高学歴化、少子・晩婚化、親への依存期の長期化など、青年期から成人期への移行が長期化し、大人になるプロセスが大きく変貌しつつある。青年期に出現しているニート(62万人、2006年)、引きこもり(26万人、2006年)、フリーター(181万人、2007年)などの問題の改善は、今や重大な政策課題となっている(厚生労働省、2008)。青年期は文化的に作られた発達段階と呼ばれており、文化と社会経済構造の影響を受けて、歴史的にも国や民族によっても多様な「青年期」のあり方があるわけだが、現代日本の青年期は前途多難の様相を呈している。激動する現代においては、普遍的な価値観が存在すること自体が難しくなっており、育児意識や心理的離乳の在りようも、時代とともに変遷していくことは必至である。また、「友達親子」などに象徴されるように多様な親子関係が出現しており、今後親子関係を捉える枠組みも常に修正を強いられていくことになるだろう。今回の結果も

その通過点に過ぎず、次世代の子どもの育ちを支援していくうえでも、常に継続的に探索していくことが求められている。

引用・参考文献

- 1) Bowlby J [1969] (1999). Attachment, 2nd edition, Attachment and Loss (vol.1), New York: Basic Books.
- 2) 原田正文 (2006) 『子育ての変貌と次世代育成支援－兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防』名古屋大学出版社.
- 3) Hollingworth, L.S. (1928) *The psychology of the adolescent*. New York: D. Appeltan and Company.
- 4) 人口問題審議会 (1998) 『人口減少社会、未来への責任と選択－少子化をめぐる議論と人口問題審議会報告書』ぎょうせい.
- 5) こども未来財団 (2001) 『平成12年度 子育てに関する意識調査報告書』.
- 6) こども未来財団 (2004) 『平成15年度 子育てに関する意識調査報告書』.
- 7) 厚生労働省編 (2008) 『厚生労働白書平成20年度版』ぎょうせい.
- 8) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室 (2004) 『少子化に関する意識調査研究』.
- 9) 前田正子 (2004) 『子育てしやすい社会－保育・家庭・職場をめぐる育児支援策』ミネルヴァ書房.
- 10) 松井 仁・釜野明子 (1996) 「心理的離乳の学年差 (発達9-PB11)」日本教育心理学会総会発表論文集(8), 94, 日本教育心理学会.
- 11) 三田英二 (2005) 「性格特性からみた女性の自立心・依存心」研究紀要(9), 静岡県立大学短期大学部, 73-77.
- 12) 三鷹市 (2004) 『三鷹市次世代育成支援に関するニーズ調査報告書－ふれあいと支えあいで子育てにやさしいまちづくり』.
- 13) 内閣府大臣官房政府広報室世論調査担当 (2004) 「子育ての楽しさ、辛さについて」『国民生活に関する世論調査平成14年6月調査』.
- 14) 内閣府 (2008) 『平成20年版少子化社会白書 (少子化の状況及び少子化に対処するために講じた施策の概況に関する報告書)』ぎょうせい.
- 15) 落合良行・佐藤有耕 (1996) 「親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析」教育心理学研究44(1), 日本教育心理学会, 11-22.
- 16) 大日向雅美 (1977) 「母性意識に関する発達の研究－3つの世代間の差異について」日本心理学会第41回大会発表論文集, 694-695.
- 17) 大日向雅美 (1988) 『母性の研究－その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証』川島書店.
- 18) 田島啓子・両宮由紀枝・水野恵子 (2007) 「育児意識と育児支援欲求の関係」日本女子体育大学紀要, 第37巻, 9-20.

(平成20年9月17日受付)
(平成20年11月26日受理)